

「浄土教典籍目録の作成」研究班の概要と本誌発行の経緯

研究班主任 安 達 俊 英

はじめに

一、研究活動歴と本誌発行の経緯

「浄土教典籍目録の作成」班は「浄土教典籍目録と浄土教文献目録の作成」班を引き継いだものといえることができる。この研究班は平成十一年度から平成十三年度まで研究を続けたが、予算・人員とも十分ではなく、よって実質的には主として「浄土教文献目録の作成」の方に重点が置かれることとなった。

そこで、「浄土教典籍目録」の作成の方も本格的に着手すべく、平成十三年度に「浄土教典籍目録の作成」班が「浄土教典籍目録と浄土教文献目録の作成」班から分離する形で立ち上げられたのである。そして「予備研究」一年を経て、「基礎研究」に昇格した後、ようやくデータ作成が本格的に進展するようになった。この「基礎研究」は三年間続けられ、作成データ

数も順調に増えてゆくのであるが、その後、研究の更なる発展を画して申請した「発展研究」への昇格は、当研究が「発展研究」にふさわしくないという理由から、却下された。ただし、大学の建学の精神などからしても本研究は継続されるべきというところで、特例として「基礎研究」を更に二年間続けるということになった。本年度（平成十八年度）はその二年目である。

ところで、本来なれば「基礎研究」は研究期間が終了した時点でそれまでの研究成果を公表しなくてはならないのであるが、特例的に「基礎研究」を続けることとなったため、最初の三年間の「基礎研究」の成果公表に関しては、その義務も権利も消滅することとなった。しかしながら、研究班員の間から、これまでのデータ作成の中で新たに判明した事柄などを論文として公表する機会を持ちたいという声が挙がってきたため、特別に研究誌としての「別冊」の発行を申請し、これが認められ

て本誌の刊行に到った次第である。

二、本研究班の研究目的とその進捗状況

佛教大学の建学の精神である法然の教えは、いうまでもなく浄土教の範疇に含まれるものである。ところがこの浄土教の教えに関しては、研究書・研究論文等による多くの研究成果の蓄積がある一方で、その基本資料たる浄土教諸典籍の目録は未だ簡易版さえ存在しないのが現状である。確かに、一部の浄土教典籍（例えば『往生要集』『選択集』『教行信証』など）については、質量共に膨大な研究成果を有するものの、逆にそれら以外の大半の浄土教文献については、あまり研究がなされておらず、中には内容は全く不明という典籍さえ少なからず存在する。

このような状況の中にあつて、本格的な浄土教典籍目録の作成は包括的な浄土教研究の端緒となるだけでなく、浄土教研究の基本資料として重要な位置づけを担うこととなる。具体的にはインド・チベット・中国・朝鮮半島・日本にわたる浄土教文献の網羅的な目録作成を目指すものである。（但し、江戸期以降の浄土教文献まで扱うことは、さすがにその文献量のあまりの膨大さ故に不可能であるので、最終的には室町期の浄土教文献までの目録となる予定。）

なお、採録項目としては、書名・書名別名・著者・著者別名・著作年代・写本所在・写本奥書・刊本所在・刊本奥書・活字テキスト・現代語訳・参考文献・解説などがあり、単なる「目録」というより、実質的には「文献解題目録」といった性格が強いといえる。特に、写本・刊本の奥書・刊記の採録、及び内容・著者略歴・研究史などについての解説に多大な時間を要することとなる。

さて、本研究は既に「予備研究」一年、「基礎研究」五年近くを経て現在に至っている。その間に入力した総データ数は五〇〇件（完成度の低いデータを加えると六〇〇件）以上にのぼり、インド浄土教文献・チベット浄土教文献・中国浄土教文献・朝鮮浄土教文献・奈良浄土教文献・平安浄土教文献・鎌倉浄土教文献・室町期浄土教文献のデータに関して、平均すると7割以上は入力し終えたと考えられる。ただし、かなり進んでいるインド浄土教文献、チベット浄土教文献に対し、特に文献量が膨大な鎌倉・室町期の文献のデータ入力はやや遅れており、このあたりの文献を引き続き精力的に採録してゆく必要がある。また、既入力データの校正や、予算と時間の関係で後回しにしていた他大学や寺院等所蔵の写本・刊本の調査も、これからまとめて行う必要がある。これまでの進捗状況からして、おそらく、完成までに最低二年（精度を更に上げようとするれば

四年）は必要と考えられる。

なお、採録データの最終的な公開方法であるが、とりあえずCD-ROMに保存して配付するか、ネット上で公開するのが現実的であると考えられる。ただし、諸々の点からして、紙媒体でも刊公されるのがより望ましい。もちろん、その場合は、編集作業に相当の時間がかかることは覚悟しなければならぬであろう。

三、本誌の所収論文について

本「別冊」の刊行に関しては、実際にデータ作成の作業を行っていた方々に対し論文の投稿を求めた。その結果、十五人の方から投稿希望の申し出があったが、最終的には、インド二篇、チベット一篇、中国一篇、平安浄土教二篇、鎌倉浄土教五篇の計十一篇の論文が掲載されることとなった。掲載順は地域毎に分類した後、扱う文献等のおおよその成立年代順となっている。

地域も時代もテーマも様々で統一性には欠けるが、逆にそれだけ本研究が広い範囲を扱っている証となろう。以下に各論文の要旨を、ほぼ掲載順に記しておく。なお、要旨自体は著者本人が作成されたものであるが、一部、主任の私が内容・文章表現を修正しているので、その点をお断りしておきたい。

佐々木大悟「〈無量寿経〉における阿羅漢・声聞の変移」

本論文では、〈無量寿経〉において描写される阿羅漢（声聞）の用語の変化に注目した。これまで静合正雄氏などにより指摘されていた阿羅漢の問題を集中的に扱った。その調査の結果、〈無量寿経〉類における「菩薩阿羅漢」という言葉は後のヴァージョンになるほど減り、「菩薩」や「衆生」などの言葉にとって代わられることが分かった。最初は「菩薩」と同等程度に価値付けられていた「阿羅漢（声聞）」は徐々にその勢力を弱め、逆に「菩薩」が重視される方向に進んでいったといえる。

中御門敬教「〈阿弥陀鼓音声陀羅尼経〉の研究―阿弥陀仏信仰の密教への展開―」

阿弥陀仏信仰はインド仏教圏において〈無量寿経〉以降どのように展開したのであろうか。一つの流れは〈普賢行願讃〉を主とする華嚴系統、その延長線上での密教への展開である。本稿では陀羅尼を導入して密教化の端緒ともなり、中国、日本の浄土教では極楽の穢土相を説くことで注目された〈阿弥陀鼓音声陀羅尼経〉を蔵訳、漢訳より翻訳研究した。内容的には、先行する〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉の所説とその展開という観点

からも検討した。

藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択―『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳―」

ラーガアスヤことカルマ・チャクメー (Karna Chags med 一六一三―一六七八) はカギユ派の有名な学者・行者であり、彼の『清浄大楽国土誓願』はツォンカパの『最上国開門』とともにチベットの二大極楽願文である。彼の著『山法・独居修行の教誡』はカギユ、ニンマの行法集であるが、第四二章は諸国土や聖地を挙げて極楽への往生を選択している。チベットの浄土観を知るには類例のないこの著作を、本稿において和訳研究した。

齊藤隆信「『後出阿弥陀仏偈』とその用途」

後漢失訳の『後出阿弥陀仏偈』一卷は、これまでまとまった研究成果が報告されていない。ただ真宗ではしばしば安居で講説されたようで、末書は写本・版本を含めておよそ十六種が現存しているものの、これら末書は概ね内容の解説に終始しており、テキスト批判や成立・漢訳の問題、そして実際の用途などに言及することはない。そこで本稿においては本書のテキスト

を収集し本文校訂することにより、原初形態を推定復元するとともに、本書の成立時期や偈の韻律配慮、そして漢訳者の想定と実際の用途や後世への影響など、関連する諸問題の考察を行った。また稿末に簡単な語釈を付した。

上杉智英「真源撰『往生要集裏書』について」

真源(一〇六四―一一三六)撰『往生要集裏書』は従来佚書とされ、良忠(一一九九―一二八七)撰『往生要集義記』にみられる逸文が知られるのみであった。本稿は先行研究を検証し原本調査を行うことで真福寺蔵本・金沢文庫蔵本の現存を確認し、真源の行実・著述と共にその内容・構成を紹介するものである。本書の全体像が確認されたことは『順次往生講式』の撰者としてのみ研究対象とされてきた真源に対し新たな観点を供するものとなる。

能島寛「『長西録』にみられる寺門僧について」

浄土教章疏目録の嚆矢である『長西録』には既に散逸したと考えられる典籍の名が多数記されている。そのなかには園城寺の僧侶(寺門僧)による著作も含まれる。本稿ではそれらの寺門僧のうち平安期の学僧に焦点を当て、彼等の事績や著述について明らかにした。そして、国語学や美術史における日本仏教

研究の成果を参考としながら、その中心的な学僧となる三井大阿闍梨慶祚と唐房法橋行円について特に考察を深めると共に、平安期の寺門僧による阿弥陀仏信仰についても若干ながら言及した。

安達俊英「法然『一枚起請文』の文献的性格」

法然の『一枚起請文』は、江戸期以来一般的に、法然が自身の教えの正しさを弥陀・釈迦の二尊に「起請」した文献であると見なされてきた。しかしながら、タイトルが後世の命名であることや、法然の他の「起請」文献との比較、「二尊の憐れみにはずれ」云々といった表現との類似表現の検討からして、おそらく本来は「起請文」でなく、弟子達への「訓戒」であった可能性が高いことを指摘した。また『一枚起請文』が口授による教えの伝搬を意識した文献といえるのではないかということもあわせて論じた。

坪井直子「龍神になった皇円―孝行集と法然上人伝―」

法然の師である肥後阿闍梨皇円が、龍蛇となって遠江国の桜ヶ池に住むという説話が法然伝にある。中世の唱導資料である『孝行集』にもこの説話が収録されており、それについて法然伝の系譜上の位置づけを試みた。その結果、『一期物語』に

抛りつつも、絵図を伴う法然伝と関わることが判明した。また、この説話は弥勒信仰を批判したものともされるが、それと同時に孝行説話としても捉えられていたようだ。師弟間の説話が孝行の範疇に入る理由を考察し、『梵網經』が説く父母・師僧への孝順が底流にあると推定した。

吉田淳雄「『念仏本願義』について」

『念仏本願義』は従来、その根拠が曖昧なままに長西の撰とみなされ、長西思想の研究素材とされてきた。しかし、長西の思想と他の「諸行本願義」諸師の思想との間に大きな隔たりがあったと指摘される今日、『念仏本願義』の撰者問題も再検討の必要がある。そこで本稿では、『念仏本願義』と長西の弟子・道教撰『諸行本願義』との比較対照を試み、『念仏本願義』の撰者は『諸行本願義』と同一人、すなわち道教であろうと推定した。

米澤実江子「『莊嚴記』について」

明恵（一一七三―一二三二）は、法然撰述の『選択集』（一一九八）を批判するために『摧邪輪』（一二一二）を著わし、翌年にはその内容を補足するために『莊嚴記』（一二一三）を撰述した。しかし明恵の『選択集』批判の研究は、多くが

『摧邪輪』に依っており、『莊嚴記』における批判内容ならびに書誌の研究はあまりなされていない。そこで本稿においては、①『莊嚴記』の所本の調査報告と、②批判内容の考察による「『摧邪輪』の」補足」としての性格の指摘を行った。

高山秀嗣「真宗聖教書写史における存覚の位置」

真宗聖教書写史における存覚の位置の再検討を図っていくことが、本論の目的である。それはまた同時に、真宗史における存覚の位置を明らかにしていくことにも繋がるものである。親鸞や覚如に見られる聖教書写は存覚にも継承されており、真宗史における伝道活動の一環として後世の蓮如らにも受け継がれ展開していく。存覚の手になる多数の真宗文献はその発展に多大な意義を有しており、著述の執筆背景からもそれを明確に窺うことが可能であるといえる。